

野 辺 地 戦 争 に つ い て (上)

桜 庭 秀 俊

はじめに

野辺地戦争について、これまでの最もまとまつた論著としては、山崎有信氏の「野辺地戦争記聞」(明治四十四年)があげられる。その後の野辺地戦争に関する叙述は「野辺地戦争記聞」の成果に貢うところが大きく、ほとんどこれの見解を一步も出るものではないといつても過言ではないであらう。^①しかし、「野辺地戦争記聞」ですべてが論じ尽されたわけではなく、まだ研究の余地があると考ええる。又野辺地戦争そのものをとりあげての研究論文もこれまで出されていないようである。そこで、「野辺地戦争記聞」を才一に、先学の驥尾に附して私なりに野辺地戦争について少しく述べてみたいと思つた。

野辺地戦争は「戊辰大戦争の一小波乱にして其の勝敗元より大局の上において動搖を来たすが如きものにありず」(外崎寛の「野辺地戦争記聞」序)といわれ、又大義名分の無い無用の戦であつたともいわれているが、弘前、盛岡兩藩の動向をのびさにみてゆくと、武力衝突は

不可避であつたと考へられる。

更に津軽、南部の積年の宿敵意識がからんでいたことは野辺地戦争を特異な存在としてゐる。その意味では津軽、南部の私戦という見方が成り立つが如くに考へられがちである。しかし、中央の政局の推移の中にこれを把握し位置づけることが大加緊ことは言を俟たないところであるし、そうしないと野辺地戦争の正当と評価もなされないことになる。

会津、庄内三藩を除く東北諸藩は混乱した情勢に対して判断がつかず、去就に迷ひ、その藩がおかれていた地理的事情、周辺の軍事情勢、藩内の勤王、同盟派の指導権がからみあつて、あるいは朝敵となり、あるいは官軍となつたのである。盛岡藩は朝敵となり、弘前藩は官軍となつて兩藩はその方向を全く異にしたことがその間の事情を物語るが、同時にそれは来るべき悲劇を孕み待果となつた。戦後、野辺地戦争では完敗に終つた弘前藩ではあつたが、官軍側という立場は大きな発言力を持ち、盛岡藩は処罰を受ける羽目となつた。だから結果的に「

秋田縣及岩手縣(弘前藩のこと)ニ而官軍ニ相成候義は誠ニ御高軍ニ御座候」(「家内年表」明治元年十月十二日条)という印象を一商人が持ったのも無理からぬところである。

本稿では弘前藩、盛岡藩の動向と野田地戦争の序幕ともいふべき野田地砦奪までのことについて考察を加えようと思ふ。

註

(1) 「野田地戦争記聞」は才一編野田地港の砲戦、才二編馬門戦争類末、才三編史料からなる。叙述が雑然としていることは否定しがたいが、数多くの史料が掲載されていて後学の便りところである。又著者が弘前藩、盛岡藩にとらわれることなく頗る公平な視点から論考していることは特記するべきである。

今日野田地戦争に關して多少とも触れている著作等を列記すると次の如くである。津村立一「野田地戦争」(ヘーリ―東北、四十二年一月十三日から連載)、尾崎竹四郎「痛恨の維新」(東奥日報、四十三年七月十八日から連載)、同「新訳青森県史」後篇、小野久三「青森県政治史」(牛草寿夫「ふるさとの歴史」)、戸田達「戊辰誌」、菊池悟郎「南部史要」(岩手県史)才六卷、「青森市史六」政治篇、「弘前市史」藩政篇、「概説八戸の歴史」

下、青森県の歴史」(弘前大学国史研究会編「野田地町郷土史」)

なお、本稿での主要参考史料は「青森市史七」資料篇、「青森県史」才三卷、才五卷、「津軽承昭公伝」である。

(2) 「家内年表」は青森市の廻船向屋伊東善五郎家の日記であり、町人の目から見た明治の激変が描かれ、貴重な史料である。本稿では、主に明治元年の記事を活用している。なお、「家内年表」は「青森市史七」資料編一に収められ、国史研究才五一号にその紹介がある。

(一)

明治元年一月三日、薩摩、長州藩等武力倒幕派の挑発により、奥羽、伏見の戦いが起こり、それが奥羽戊辰戦争の導火線となった。

かくて会津、庄内兩藩の征討をめぐり、同年五月三日奥羽列藩同盟が結成されたことは、東北地方に新たな事態を到来させることになった。東北諸藩はここに、薩長の官軍に対する態度を決定したわけであるが、それに至るまでには迂余曲折があり、諸藩の間には活発な使者の往来がみられる。弘前藩にあっては、秋田藩、仙台藩、米沢藩等の使者を迎え、これに対して答礼使を派遣す

ると共に、奥羽鎮撫総督府に対して、しばしば使者を送つて情勢の掌握に懸命であつた。

即ち、三月四日秋田藩使が弘前藩を訪れ、「提携して王事に勤めん」ことを説き、翌五日今度は仙台藩使が、会津征討をめぐつて公平の処置あらん事を奏聞するため、同じ協力してくれるよう申し入れている。(この両藩に對して、三月二〇日弘前藩では家老西館字暗、用人楠美庄司を答礼使として派遣)

同月二十八日には、仙台藩より再度使者が訪れ、更に四月七日には、米沢藩からも使者が來つてきている。(四月十七日樋口小三郎、伊藤友之進を答礼使として米沢藩へ派遣)

そして、同月十三日奥羽鎮撫総督府より庄内征討の左の命を受けている。

「

津輕少將

右今般 出羽庄内征討 佐竹右京大夫江申付候向、
為庇援早々人数可差向候事

辰四月六日

鎮撫総督朱印

但 手配等之儀ハ 久保田へ可申合事」

そこで、弘前藩は同月二十一日討庄庇援の先発隊を遣發させ、以後漸次兵を繰り出し、その数は五月十三日までにおよそ五百四十余人に達している。しかるに四月二十七日、白石にいた弘前藩家老山中兵部より庄内藩の

「罪跡分明ならざるを以て、奥羽諸藩要議を尽し、太政官に上陳する所あるを以て、一先討庄の兵を解くべきを総督府へ申牒せり」という知らせを受けた。次いで五月三日には奥羽列藩同盟を結ぶに至りており、かくて弘前藩では同月四日、直ちに討庄庇援兵を撤回すべきを命じ二十六日を以て完了している。

五月中旬、弘前藩にとつては厄介な問題が持ちあがつた。それは沢島量副総督の津輕領内への転陣問題であるが、これに對して弘前藩は体よくこれを断わるの態度をとっている。五月一日、秋田湯沢にいた沢副総督は形勢不穩の折、ひとまず函館に渡航せんとし、津輕領内通行の便宜を依頼してきたのである。この通行可否をめぐつて藩論は紛糾したが、結局これを迎えることに決し、通行に支障なきよう藩内に令達するに至つた。

しかるに十二日、山中兵部より奥羽列藩同盟が結成され、官軍に抗すべきを約したるの報に接し、藩議はついに両全の策をとるべきことになった。而して、沢副総督に對しては藩情が着ち着くまで、秋田に駐在してくれるよう請願することになるのであるが、この向の弘前藩の苦衷は左の諸士に告示したる藩主の親書にうかがわれる。

「三位殿丈は奥羽御鎮定運は、何地にても御警征可致候得共、御供薩長兵隊入國之儀、兼て於仙台各藩會議之前へ差響き不都合之儀有之候に付、其段不失條理、品能取計方申付候得共、事情如何體之行違相生候哉も

難計し

かくて、同月十四日神東太郎を使者として派遣、落情鎮定まで転陣を中止せられるよう陳情している。更に弘前藩では、秋田から津輕領内に至る通路を樹木を伐倒して堅固という手段を講じ、万全の策をとっている。即ち、同月十四日仙台より帰る途中の山中兵部は、大岡越前境の樹木を伐りて道路を閉塞し、十六日には家老杉山八兵衛、用人加藤善太夫が碓ヶ岡に於て樹木を伐り、秋田よりの道路を閉塞しているのである。十七日には秋田藩に使者を派遣して、沢副総督を当分秋田藩内に滞在させるよう依頼している。

而して、同月二〇日に至り碓ヶ岡国境の道路を回復し、沢副総督に再び領内通行支障なきを報ずることになるが、二十七日、沢副総督からの使者は能代より函館に渡航すべき旨を述べている。かくて、沢副総督の弘前藩への転陣をめぐる問題は一応落着いたが、必竟、弘前藩にとつてはうまく切り抜けたといえるが、奥羽列藩同盟の成立の時期ではやむを得ない処置であつたろう。しかし、かかる弘前藩の態度は鎮撫総督府に於て、少なかりず疑惑を生じ因となり、次に述べる九条直孝総督の弘前藩通行の問題が起きた時も、この一件が尾をひくことになる。

このように弘前藩は、他藩よりの相次ぐ使者の往来、奥羽鎮撫総督府から庄内征討の命令、奥羽列藩同盟への加担、更に沢副総督の弘前藩への転陣をめぐるこの問題

があつたが、六月に入るや十日、盛岡に在陣していった九条総督の命を受けて、参謀の前山勘一郎、田村乾太左衛門が弘前藩を訪れている。前山らの藩内教使増起の形勢を向うののに対して、家老の山中兵部、面館守隆は落情鎮定につき総督府の弘前藩への転陣に支障なき旨を答えている。ところで、前山、田村の弘前藩訪問の意図は何かというに、奥羽列藩同盟の成立により窮地に立つた鎮撫総督府が、応援参謀前山勘一郎の支援を受け、去る五月八日、仙台を脱して盛岡藩への転出と相成り、そして盛岡に於て、奥羽の形勢を展望し、各藩の動向を探索しつつあつたのであるが、かかる情勢により前山、田村の弘前藩訪問となつたのである。この時の総督府の意向は青森を経由して弘前に入り、秋田より船で京都へ帰ろうというものであつた。しかるに弘前藩ではこれを承諾したのであつたが、先に沢副総督の弘前藩転陣に際しては、これを拒否した事ともからんで、弘前藩に於ては相当な配慮を要している。

「沢様交付屬一人教含み合甚不宣、沢様より朝敵同様ニ御回（弘前藩のこと）の事 九条様へ色々申御通ニ相成候」（「家内年表」六月十四日条）

この為、弘前藩では一応承諾したものの、尚又弘前藩通行をせむ仰付けられるようにと前山、田村が盛岡へ歸つた翌日に、御手廻り粗頭山田十郎兵衛、同添役長尾忠左衛門らを使者として総督府の許に派遣している。

又、弘前藩では青森所奉行野呂謙吾に命じて総督府一行の指割をさぞ準備を整え居るのであった。しかるに、総督府の一行は盛岡より直接秋田へ向かうことになった。即ち、六月二十四日盛岡を出発、栗石より奥羽の国境四尾峠を越え生保内に出、七月二日には次副総督とも合流して、秋田に総督府が設置されることになったのである。付言すれば、これに対して弘前藩は六月二十七日家老津軽図書を使者として秋田に赴かせている。

かかる切迫せる情勢下に弘前藩では、同月二十三日上士を城中に招集し、時勢に対し藩のとるべき方策八ヶ条を問題として諮詢しているが、それは直面するであろう事態を想定し、その対策を検討したものである。特にオ八条に於ては「南藩に而は両端にまたかり居候に付官軍に相成候得は虜盟の罪を以て仙台より兵を催し討入可申事」とあり、これに対してはいかに対処すべきかを取り上っている。而して協議の結果、那奉行小山内清之丞の及び官軍と共に進退すべきを述べただけで、大勢は奥羽列藩同盟の趣意を重じることになった。同盟を尊重するといつても、それは薩長中心の官軍に抗拒するといふのであって、総督府の命を奉じて勤王に従事するといふ意識のあつたことはいふまでもない。

しかるに、二の藩論をくつがえし以後の弘前藩の方向を決定づけたのが、例の西館平馬の帰藩であつた。平馬は去る六月一日、朝政及び岩倉具視に着情書を呈出し、

藩主の祖先以来勤王の志厚きこと、僻陬の地ゆゑ事情疎隔する旨を述べ、朝廷の指牌を請うている。そして奥羽列藩同盟結成の事態に直面し、平馬は直ちに朝廷よりの勤王奨励の令書と京家近衛忠房、忠房の教書を携え、七月一日神戸を出帆、四日には三尻に上陸して翌五日、弘前に到着するや、両書を呈し時勢の真相を詳報し、又藩邸に正邪利害を切論し勤王の固是を一定せんことを建言したのである。

弘前藩は先に同盟尊重が大勢を占めたとはいへ、それはあくまで便宜的なものであり、形勢観察よりの帰結であつて、何らの積極性が見い出されるものではなかつた。更に四日には、先に総督府を迎えたる保田藩が同盟を脱退し、討庄の態度を明らかにするに及んだことは、東北諸藩での孤立を恐れる弘前藩にとつて、隣藩の動向は刮目するところであつたに違いない。かくして、同月八日弘前藩は同盟を脱し「一意王事に勤むるの方向を確定」するに至るのである。そして一〇日には、又保田藩に書を送り協力して勤王に従事するべきを照会している。又、十四日には盛岡藩にも藩使を派遣しているのであるが、十三日には奥羽鎮撫総督府より庄内征討出兵の左の令達を受けている。

「今般更而庄内征討出兵申付候間、勿論此上進止暇昧不持而端別而勉勵頭実効候様申付候事」
かくて十八日以後、弘前藩は庄内征討官軍の応援の兵を

逐次進発させることに与る。

註

(1) 「当時形勢とんと違変ニ相成、諸侯互ニ使者友近ヲ以存念申スニ御座候」(「家内年表」四月九日条)

(2) このような使者の往来はかつてなかつたことであり、情勢の逼迫を物語る。

秋田、仙台の使者が青森を経て弘前に入るのであるが「御両家此度向東御征伐として征討將軍御下向ニ付ハ當國様へ御存念御打合ノ義ニ御座候當方へ御使者参候事も誠ニ珍敷事ニ而殊ニ世上騷乱ノ事ニ相成洵季変革ノ時ニ至リ候ニ可有之候へ共直々如何可相成哉誠ニ恐怖ノ時節ニ相成候」

(「家内年表」三月二日条)

(3) 総督府一行の通行となると町人にとりては「誠ニ以不一方御扱御宿ノ所々家業相止メ御扱ニ懣リ可申義ニ而大難義ニ御座候」であり、それが中止となるや「大風ノ吹キ候後ノ様ニ相成候」と一同安堵している次第である(「家内年表」六月十四日条)

(4) これに對して同盟尊重派の動きは必ずしも明らかではないが、朝廷よりの令書並びに近衛家からの教

書には、所詮反論などできるものではなかつたろう。「御同盟ヲ志上候御家中半分通り有之 所々寄合色々不穩ノ義御座候へ共、先漸々落着候由」(「家内年表」七月十二日条)

(二)

次に盛岡藩の藩情はどうであつたろうか。鎮撫総督府が仙台より盛岡に転陣したことに對しては既に觸れたところであるが、それをめぐつて六月二十五日、仙台藩より弘前藩に使者があり、盛岡藩の拳動穩やかたうざる爲、万一破盟の事あるに於ては兵威を以て礼責せらるべしとの要請をしている程であつた。

しかるに総督府の一行が秋田へ転出するという事態を迎えて、七月三日城中に重臣會議を開催したのであつたが、意見が分れて藩の方針を決定するには至らなかつた。それでも大勢は同盟尊重に傾いていたようであつたが、結論を即決せず、先に京都に派遣していた藩主の甥にあり家老である榎山佐渡を召隠し、その意を伺ががって藩論一決に持ちこもつとしたのである。かかる情況は、弘前藩の動向と類似しているといわざるを得ないが、やはり奥羽の地にあっては、所詮中央の情勢に疎く、とかく空論に陥りやすいのであつて、豫議一定しだいことはやむを得ざるところであり、その爲、京都に派遣され中央

の情勢に明るい者の竜児が担当の効力を持つことになるのである。しかるに、榎山佐蔵は同月十六日盛岡に帰るのであるが、途中、仙台に於て奥羽列藩同盟の首謀者の仙台藩家老但本士佐と会見し、持論の佐幕の意向を強めることとなる。而して盛岡藩では、すでに同盟を脱退していた秋田藩に對し、これを討伐するの決定を下すに至るのである。盛岡藩がこのような結果を必るに至るには、仙台藩から秋田藩討伐をしば／＼督促され、國境の兵をして圧力をかけられていた事情があり、従つてその意味では「南部家の佐幕は自紅の必要上」(『野立地戦争記節』)ということもいえるであらう。所詮東北諸藩に於ては「勤王か同盟か」という一般論よりも、どの藩と結び、どの藩を敵として戦うかという現実論の方が一層切迫した向題」(『青森県政治史』)という事情は看過できないところである。

かくして、榎山佐蔵、向井蔵人を絶大將とする諸隊が同月二十七日、秋田との國境鹿角郡に出陣し、八月には大館を陥し入れるなど快進撃を続けることになる。がよゝに、弘前藩と盛岡藩はその方向を全く逆にしたわけであるが、両藩の間では國境を主に緊迫した対立關係を生ずるに至るのである。

さて、ここで盛岡藩の支藩である八戸藩の動向について若干触れておきたい。八戸藩に於ても他藩との活発な使者の往来がみられるのは当然であり、二月二十八日秋

田藩の使者志賀為吉が八戸藩を訪問し、隣國同志として勤王に戮力せんことを説き(これに對して三月八日八戸藩では太田広成を秋田藩へ派遣)三月十八日には漆沢蜜右衛門を仙台藩に派遣し、更に四月二十八日には船越与次右衛門を秋田藩に派遣し誼を通じている。由四月には、八戸藩は奥羽鎮撫総督府より庄内征討応援の旨の書を受け、竜児以下百五十五人が出兵準備をしているところ。奥羽列藩同盟の成立により、五日五日鎮撫總督府から左の表書があり撤兵することになる。

「其藩新庄表へ為応援出兵之人數一先國元へ引率直而指揮可相待候事」

六月には盛岡に幕陣の九条、鹽田兩卿から進物があり、これに對して盛岡、八戸兩藩名儀で総督府に一〇、〇〇〇兩献金している。

又、同月二十三日に肥前藩の軍艦孟春が座礁して八戸鰐沖に上陸するという事件が起つた。中牟田倉之助以下八十二名の乗組員は八月まで八戸に駐留したが、盛岡藩が秋田進攻を決定した情勢により、陸路野田地より津輕へ向かうことになった。この向に於ける八戸藩の待遇は好意的であった。七月一日、奥羽鎮撫総督より左の軍令があり、十五日には一小隊を庄内征討援軍として出兵させている。

「右庄内征討応援申付候間早々致用意尚指揮才無涯及出兵可致候事」

八月四日、更に庄内征討応援として苦米地又兵江が一小隊を率いて出發している。しかし、この一小隊は八日野辺地口軍事総督府内与兵江の要請で、急使野辺地に出兵することになった。八戸藩としては「盛岡の請求止み難き事情の爲」の野辺地出兵であつて、盛岡藩の強制によるものであつたという。枋内としては、弘前藩の侵攻は不可避とみて、野辺地口の防備を固めるために、八戸藩に出兵を促したのである。

因みに、八戸藩兵は八月二十一日に野辺地に到着しているが、野辺地戦争の際に於ける行動については後述する。

(三)

八月にはいるや、盛岡藩は秋田藩への進撃を敢に積極的と外交政策を展開している。

八日、南部藩臣(軍事参謀)が弘前に来りて、破盟勸王に立ちたる理由を乞ふね、佐幕に固論を翻すことを主張したのをはじめ、十四日には郡奉行新渡戸伝、野辺地代官長谷川又左衛門ら、弘前藩詰向の爲青森にやうて来ている。弘前藩ではすでに九日、総督府より南部征討を命ぜられ菊章の軍旗を授けられており、続いて十七日には醜齋忠敬参謀が、南部征討使として弘前に出張し最勝院を宿陣として、弘前藩をすくみやかに南部征討の

兵を出すべきを督促している。弘前藩は同盟を脱退した後、討庄隊は逐次派遣はしていたものの、さしたる動きをみせていなかったが、盛岡藩の秋田領への進攻、醜齋参謀の来弘に直面して、秋田藩に鉄砲及弾薬を給与したのに続いて、八月中旬より九月上旬にかけて、秋田応援軍を統発させて十二所、扇田、大館の各所に於いて盛岡藩兵と陣戦しており、珍山上總を総督として碓ヶ岡に出張させ南部征討の指揮にあたっている。又、藩主承昭も二十九日には親書を以て、秋田の官軍を援け南部藩を討つべき藩士に告示している。

こうした秋田方面に於ける両藩の武力衝突は、当然野辺地口の警戒を厳張りしめ、臨戦態勢に入っていくのであるが、それではこの方面の状況を考察してみたい。⁽¹⁾
『津輕承昭公伝』によると、八月一日「盛岡藩多数の兵を發して我藩に向んとし今や北郡野辺地に至るの報ありたるを以て、既に函館警世のため義航せんとして青森に帰陣したる木村繁四郎を更に大隊長とし、其隊兵を率い方向を転じて小湊口へ出張すべきを命じ、⁽²⁾続いて同地へ向け弘前より追々出兵して繁四郎に付属せしむ」とある。「家内年表」によると、木村繁四郎の一行二百余人が八月四日青森に到着し、そのうち百三十人は三厩より函館へ渡航しており、取り敢えず七十余人を以て平内へ急使出立させた模様のようなのである。又、前述の郡奉行新渡戸伝らの弘前詰向については次に述べるとして、これ

に隣陣して盛岡藩の函館警征兵の撤退があり、弘前藩でもこれに対抗して、函館警征の隊兵を帰藩させるといふ事件が生じている。盛岡藩では八月一日、陣屋を焼ぎ払うと同時に函館詰の人数二百人余を函館府の許可を得ずに、フランス船を雇い入れて野辺地へ上陸させているのである。そして翌十一日には、函館詰の南部家留守居上山守古が弘前藩留守居役奈良原左江門と面談しており、その内容は明十二日に新渡戸伝らが弘前藩出張を命ぜられ、返答のいかんによつては戦争になるかも知れぬ為、七戸まで兵隊を繰り込み置き野辺地へ進発の手筈であるといふにあつた。これに対して、奈良原左江門は函館警征の者頭三橋左十郎に事の次方を告げ、共に函館府に御守征の御暇を願ひ出て許されている。この間の事情は三橋左十郎が藩主に具状せる書面に詳しい。

「南部の動靜如此なれば我藩に於ても由々敷大事最早嘆願して人数一先づ帰藩の外なかるべし（中略）我藩祖先割拠紛争の時よりして累代意趣を差含み居り候回柄に付、寸地も侵掠されは匹夫匹婦も憤慨に情へがたく云々」

と両藩とも互に牽制しあひながらも不利の事態に対処する動きをみせているといえよう。而して、三橋左十郎は同月十四日一先警征兵を率いて函館を出帆、翌十五日青森港に到着している。率いる人数は百三十人余であり、この他に前述したが、三蔵より渡海した水村繁四郎配下

の百三十人を合せて二百五・六十人であつた。これに加えて弘前よりも追々と平内へ兵を送り込んでおり、野辺地口にはわかに危機が醸成されつゝあつた。

それでは次に郡奉行新渡戸伝、野辺地代官長谷川又左衛門らの弘前藩詰向について述べてみよう。新渡戸らの派遣は八月一日に命ぜられており、家老南部玄物が談判の内容について色々と言ふところがあつた。玄物はこれと同時に前述の太田康助を破々園方面より弘前藩に送つていて、弘前藩の国情探索に躍氣であつた。八月十三日、新渡戸らの一行十七人は青森に到着し、翌十四日には弘前へ出立するはずであつたが、弘前藩では御馬廻り組頭秋元蔵主、勘定奉行佐藤英馬を派遣し、青森町奉行野呂謙吾と共に青森にて会談させている。弘前藩では藩の軍役を派遣せず且弘前に入れず青森で応対させたわけである。談判の要旨は弘前藩が同盟を脱し且秋田藩に援兵を出していることの事実ありと糺したのに対し、弘前藩の使者は近江公よりの教書を以て同盟離脱に至つた旨を述べ、更に秋田への援兵の事実はなしと答えている。この談判は両藩とも衝突は必定と交て、野辺地付近の警備は万全を尽していたのであつて、かかる前提に立つて、盛岡藩にあっては弘前藩の動靜を確めるにあつたと考えてよいのであらう。更にいふならば、盛岡藩に於ては秋田方面での戦國もあり、極力弘前藩との衝突を回避したいとの意図もあつたのではないかと思われる。

談判後の八月十八日には、新瀬戸、長谷川の連名で秋元、野呂、佐藤あてに左の書を送っている。

「以宿銓一翰申入候、然は先般及御談判御同盟御背候御回情具に致承知候得共、弊藩より進軍可致凶罪存慮の処庄内藩爲使者 臨仲兵征・服部外右江内今般盛岡表まで到着口上の趣尊藩の儀は同盟被断候得共内東其儀無之に付弊藩撃入等の儀は相控異候様頼談に付当惑罷在候依之庄内への御頼談の有無治定の儀可被仰越候猶一応得貴意候系御左右に隨心進退可有之事に候 恐々謹言」

これに對して弘前藩では八月二十八日、破盟やむを得ざるの情実は庄内藩これを了承したるも、別に頼談せしことなしと答えている。これについては推測の域を出ないのであるが、弘前藩が庄内藩を仲介にして盛岡藩の津輕進撃を見合せるようにとの依頼をするということとは考えられぬことであり、又、新瀬戸は先の談判の折にも、弘前藩の庄内藩との合戦並びに八月五日のことであるが成田求馬の討死の事を話題にすることなどから、所詮は盛岡藩で武威を示しながら巧みに弘前藩の出方をうかがつたの感が強いのである。

ところで八月十七日に南部征討使として齋藤參謀が弘前へ転陣したことについては前述したが、商人の目にもこれによつて「平内表も何時合戦相始り候哉も難計」(「家内年表」八月十七日条)と映じている如く、事態急變を告げてきたわけである。更に九月に入つて二日、家

老大直寺族之助が青森口軍事統轄を命ぜられ、同月五日に百二十人程の兵を以て青森へ到着している。

この間、盛岡藩兵は八月二十二日大館を陥落させる勢威をみせていたのであつたが、九月に入るや形勢が逆転し、六日には大館より退却しており、又すでに、米沢藩が官軍に降伏するへ八月二十八日一など、同盟側にとつては日々不利な情勢下にあつた。九月十一日には、督府軍事掛川縣登が弘前に来て、翌日藩主と会見し総督府の命令を伝えてゐるが、その要旨は弘前藩絶料なる勤王の目的を確定し、南部征討の出兵を遷延せすのみやかに功を奉ずべしというにありた。

註

- (1) 弘前藩では、すでに五月南部との境である平内を重視していて黒石藩に命じて陣屋の構築をさせようとしている。そして黒石藩御用人らが平内へ出向いているのである。「時勢迄々切迫ニ相成候處、別而平内は南部御境固ノ義ニ付自然非常ノ御人教罷置候而も、只今迄ノ平内御陣屋は御手扶ニ付新に陣屋御取建ノ義弘前より茂被仰付ニ付要害地御見分ノ為御下リノ由に御座候」(「家内年表」五月一日日条)
- 更に七月には黒石藩御給人今田友右江内らの下向があつた。「此節物騒ノ時節御座候義別而平内は南部界ノ義候、重役ノ内三ヶ月代リニ而御詰合ニ御下

被成候由ニ御座候」(同上七月二日条)

又、盛岡藩でも四月二十一日家老安宅正路を警征として七戸へ派遣している。これは五戸及び野辺地に事あらば応援を繰り出すための警征である。後述する野辺地砲撃の際には兵を率いてかけつけており、又、野辺地戦争の際は野辺地に備陣中の時であつた。『此度安宅正路義、為御警征七戸へ被遣候に付五戸、野辺地通りに於て異夜の節は近隣の事故時宜に寄り応援致し候に付同所御給人共致指揮不苦敷旨、被仰付候間為心得申座候以上』(『青森県史卷五』)

(2) 七月二十二日木村繁四郎は弘前藩の同盟脱退に反対の諸士を預かるといふ形で函館警備の仕についている。

この日、木村繁四郎の許に家老山中兵部より左の書面が届けられている。

「一筆令啓上候然者南部表より兵隊繰出十二所落去マ赴相聞候間御自分儀出帆見合小湊口御固相心得候様被仰付候 又石郷因薦之助隊も同様引返候様申付候」(『青森県史卷三』)

(3) 太田康助に關して、前述の時は太田令助(『津輕承昭公伝』による)となつてゐるが、着者は時期、談判内容等から同一人物であると判断している。

なお、太田康助は監物の命で弘前藩との談合の次を新渡戸に會つて申し伝えてゐる。

「毛馬内御給人太田康助様々関より弘前へ罷り出で談合の段任へ申聞け候様被仰付今日(十六日)七ツ時着申」(『青森県史卷五』)

又、監物の意図が弘前藩の国情探索にあつたことは新渡戸が談判後監物あてに「津輕応援の次才猶又文談塚索国情の様子共尋細相認め」ていることから明白である。

(4) 野辺地口の事については「家内年表」に応援の義後々内々粗承り候として、弘前藩側の応答に「野辺地へ人数数百人詰合ニ相成居候へ共、此方様より手出不仕候へは南部様ニ而更々合戦可仕に組無之由ニ御座候」(八月十三日条)という記事がみえ、弘前藩が攻撃をしかけない限り、盛岡藩では事をおこす積りはなしというにあつた。

(5) これについては七月十二日、庄内藩より使節兼藩情視察のため藩士2名が弘前藩を訪ずれているが、この時、弘前藩では懇懇に同盟離脱のやむなきを述べ、更に山中兵部より庄内藩重臣松平権十郎へも一書を認めている。

これにからんでは、本多徳藏、菊地喜代太郎、石

萩岡一得等が脱藩、庄内藩へ投ずるの事件があるが、ここでは略す。

(6) 弘前より青森に藩陣の大直寺族之助に注進があり、それによると「六日とやら秋田へ加勢＝参り居候官軍ノ人数ト御國ノ人数ト双方より埒あ打ニ致候而、南部越追松大鎧ヲ取返シ候由、右ノ注進早打ニ御座候」へ「家内年表」九月八日条)

(四)

九月一日、中牟田倉之助が秋田藩の軍艦陽春丸を指揮して野辺地に砲撃を加える事件があったが、これは野辺戦争の幕開ともいふべきものであり、以下検討を加えたい。この野辺地砲撃に関しては、弘前藩と校同して海陸より一挙に野辺地を攻略する手筈であつたらしい。しかるに弘前藩の拒否にあい、中牟田は独断にて野辺地砲撃を行つたのである。中牟田らの肥前藩兵八十二名の乗り組んだ軍艦孟春が、これより先、六月二十三日八戸白銀海岸で座礁し、八戸に二ヶ月近くの滞在の後、陸路野辺地に到つたということについてはすでに述べたところであるが、その後の経過は野辺地より函館を経て秋田に赴いているのである。そして八月二十五日以来、秋田藩の軍艦陽春丸に乗り組み所々に活動の末に、総督府

よりの命によつて九月一日野辺地を砲撃したものである。これに対しての弘前藩の態度はどうであつたろうか。九月四日に陽春丸が青森に入港したのであるが藩邸中、中牟田は青森口軍事総督大直寺族之助のところへ、度々頭分の士を遣わしているが、野辺地攻撃を談判したものと思われる。しかしこれに対して、大直寺が野辺地砲撃を中止するよう勧告していることは重大である。それは今度の野辺地砲撃が総督府の命を受けているとはいふものの、中牟田ら肥前藩兵の私的報復と見なされる要素を充分持っていたからである。先の八戸沖にて座礁の折は、八戸藩に於て大分優遇されたようであつたが、野辺地に到るや南部兵に妨害され、津輕への通行ができないういふ事実があつた。その向ひことは、中牟田倉之助の書簡にも「津輕領青森より箱館へ渡海乗組の仕組に候処、盛岡縣五百余人野辺地を固め津輕通路を塞ぎ候付、進退極り血戦奮死の覚悟」とあり、「家内年表」にも「ノヘナニ而津輕へ通行被差留、無勢ノ義恥辱ヲ忍び候ニ付此度野辺地ヲ焼打不仕候へば難相成旨」(九月九日条)とある。しかし、弘前藩が野辺地砲撃に参加しなかつたに於いては、大きく次の二点が考えられよう。いは従々南に出張していた杉山上総の献言であり、いは従々南に私的報復を見越しての、且野辺地砲撃を契機として結果される盛岡藩との全面的衝突を、あくまで回避したい弘前藩の消極的態度であらう。(しかし、この事はその後の

急激な形勢変化によつて、弘前藩にあっては武力衝突の避けられない事態に陥る。

(1) については、九月七日付けで杉山上総より西館守藤、山中兵部宛の書面がある。それによると、弘前表に於ては中牟田倉之助と共に海陸より野辺地へ進撃する旨詳決し、大道寺族之助並びに木林繁四郎へその命を伝えたのであるが、杉山は小湊口、大館、生保内の三方より一斉進撃をすべきを述べ、野辺地口で先きに戦端を開けば、かえつて盛岡兵の集結を促し、弘前藩にとつて不利となるからしばらく待てというにあつた。

この献言が直ちに大道寺族之助に伝えられたことは、中牟田倉之助が前山精一郎へ提出した左の書面によつても明らかである。

「海陸一同野辺地攻撃の儀、水村繁四郎、大道寺族之助へ相談致し其支度相整罷在候處、大道寺申には野辺地口の儀は大館其他三ヶ所一斉に攻撃相整候半では不叶段城下より申越候旨有之に付、討入見合吳候様相談に俟」かくして、弘前藩の野辺地攻撃は見合わせたとなつたのであるが、この杉山上総の献言には各方面より異論不満があつたようであり、且又、その後の情勢の変化によつて、九月十八日付で西館守藤、山中兵部、津輕函書宛の杉山上総の左の書面であかるように、かなり苦しい答弁がうかがわれる。

「攻軍に於ては此口、彼口の差別無之事、一旦進軍の

御英断在りせられ候上は彼口も同様討入然るべく、数十里を隔候、兵様に於ては其手の隊長見込に任せ候外有之向敷、好し此方より期を約し候とて後患慮連約束の如く参るべきものに無之候得は蓋て彼是と手首を約し候儀は却て戦接の妨と相成候は人」

更に杉山は野辺地を攻略するにはやはり軍糧が必要であることを述べ、陽春丸側と充分な打ち合わせをし且彈藥も整つたのであれば、あとは「総督見込次第」であり、従つて「鹿角口と野辺地へ一斉討入と申候ても大方の速は頓着無之」であると述べるに至つてゐる。結局、杉山としては大館を奪取した後秋田方面からの官軍の進撃に、野辺地方面も歩調を合わせれば方が得策と考へたのであり、よつて弘前藩には野辺地進撃は今しばらく待た方がよしとし、又中牟田にもその旨伝えるよう圖かつたのである。しかし、中牟田は「時日を送り候はば却て敵より討入致し候ては是非に及ばざる」として野辺地死撃を單獨にて強行してしまつたのであつた。

このような杉山の献言が弘前表に於て受理され、大道寺に伝えられたことは、そこに献言が受け入れられる素地があつたからであると考えねばならないであろう。そこでこの点が考えられると思ふのである。陽春丸による死撃が弘前藩との申合わけの結果によるものとなれば、盛岡藩より津輕領への進撃が充分に予測されるわけである。弘前藩にとつては、中牟田らの私怨含みのまきで元

をくつて、野田地方で盛岡藩と武力衝突したとなると、全面的戦斗状態に突入するという最悪の事態を迎える可能性があるわけである。弘前藩にしても盛岡藩にしても、秋田方面に於ては支那状態にあつたものの、野田地方面に於ては互に監視態勢にあるとはいへ、あくまでそれは警備的意味あいのもので、進撃の意図は互にかつてとあるのが妥当のようであり、のりくりりと時日を過していたというのが事実であつた。

しかし、弘前藩の意に反して中牟田が強引に野田地砲撃を行なつたことが、弘前藩に少なからぬ影響を与えたことは疑いのないところであり、これが十二日後の弘前藩による馬門村夜襲への導因となつたのである。

野田地砲撃について概略述べてみるならば、九月一日弘前藩の兵力を得られぬまま青森を出帆し、陽春丸は、私的報復のこともあり、単なる示威行動に終つていたのであるが、当の野田地市中は大混乱に陥つたのである。中牟田倉之助の書面によると、台場を破壊し討死の者もあつたと記述されているが、すでに「野田地戦争記」の著者が指摘したように、台場には砲弾一発も命中せず且又破裂もせず実傷せるものもなかつたのである。これを更に確定的にするのに「家内年表」の左の記事で充分である。「ノヘチへ兼公大砲二十発余り相放し候処、ノヘチ市中は勿論不慮ノ義二付大ニ動揺混雜仕候由、然

共人家焼ケ不申、怪我人も無之由」(九月九日条)。而して、逆に野田地海岸台場よりの砲砲によつて、陽春丸は被害を蒙り、早々に同港を出帆し、その後殿ノ沢に上陸し同所の台場より砲二門などを分捕り、十三日に平館沖を經由して青森に入港している。そして、大直寺族之助に事の顛末を述べ、更に今こそ速やかに進撃すべき時であることを進言したものとと思われる。しばらく滞船した後、二〇日に青森港を出帆、秋田表へ赴きつゝ、このような中牟田倉之助による野田地砲撃は弘前藩と盛岡藩の間に一層の緊迫感をもたらし、特に野田地を中絶とする回境では一触即発の事態を招ねくことになつた。巧みに時日を過していた弘前藩には大なる刺激となり、野田地進撃を早からしめたといえるであらう。

註

(1) (前略) 然處昨晩申進候通大館恢復に相成、此後の進撃精一郎殿より乾太左江門殿へ示し合せ其上又保田表格之助殿へも相談生保内越三方より大に進撃に可相成模様にも相聞へ候、然は少々向合も有之、其内野田地口計先きに相発候ては、南部軍彼地に相集り手薄の東海岸萬一戦争其機を失し不都合有之候ては難相成に付、右の趣中牟田倉之助へ相談三方一有の手筈肝要と存候間其段至急青森小湊へ御仕向被成候様、尚此方進撃の都合次第更に可申進候、此段

(3頁下段へ続く)

(36頁下段よりの読み)

得御意如此候以上

(2) 中牟田より総督府への報告によると、九月一〇日

盛岡領段ノ沢台場分捕品左ノ通

砲 二門 五 二十七 合繋 四箱

旗 四流 幕 一張 笠 五枚

製素鎧 ニツ 印付衣物 大枚 木銃 一挺

斧 一挺

以上

(終り)